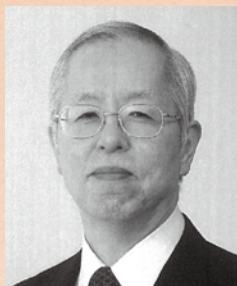




成川 哲夫

新日鉄興和不動産
取締役相談役



ベルリンの壁の崩壊その時



ベルリンの壁の前で (1989.12.8)
左が筆者、右は元興銀常務であった坂本全氏(故人)



壁を壊す東ベルリン市民 (1989.12.8)



現在のブランデンブルク門 (2012.11.18)

日本興業銀行勤務時代に、ドイツのフランクフルトに11年余り駐在し、ベルリンにも頻繁に訪れた。東西ドイツ分裂時は、ベルリンへは、飛行機で旧東ドイツ上空を飛んでテーゲル空港に行き、西ベルリン中心部に入るのが通常であった。今から思えば不思議であるが、西ベルリンは東ドイツの中に浮かんだいわば島であった。当時、東ベルリンへも仕事でたびたび訪問した。壁を越える時の緊張感と一変する街の風景は、今でも記憶に鮮明に残っている。

1989年11月9日、ベルリンの壁が崩壊した。その前年の1988年9月に、西ベルリンで、IMF・世界銀行総会が開催され、私も興銀の事務局として参加した。総会では東西ドイツの融合が訴えられたが、その一年後に壁が無くなることを予測した者は誰一人としていなかった。

1989年東ドイツ国民が、国境を開いたハンガリー経由で西側に脱出し始め、東ドイツ政府は出国規制緩和策を決定した。しかし、政権内部での手違いで、「直ちに壁が開かれる」と、11月9日夜に東ドイツ国営テレビおよび各国メディアが報道した。東ベルリン市民はベルリンの壁の検問所に殺到し、対応に困った国境警備隊の現場指揮官は、同日深夜に独断で検問所を開放して壁が開かれた。

その時、私は西ベルリン出張中で、テレビの放送をホテルで見ていた。東側から続々と人が西に入る映像に驚愕し、直ちに壁に向かった。歴史的瞬間に立ち会ったわけだが、カメラを持っていなかったのが悔やまれる。

壁が崩壊した一カ月後の12月8日に、尊敬する上司であった黒澤洋副頭取(1990年に頭取就任)が、どうしてもベルリンの壁の状況を見たいと来られ、一緒に見に行った。黒澤さんはドイツとの関係が深く、日本で数少ない世界に名の通った国際派バンカーだった。1989年の二枚の写真は、黒澤さんが撮ってくれたものだ。

壁崩壊後の西独政府の対応は迅速であった。三週間後には、悲願の東西ドイツ統合を発表し、1990年10月にドイツが統一した。このような速いスピードでドイツの統合が行われることは、当時まったく予想されなかったが、旧西ドイツのリーダーたちは、その唯一とも言えるチャンスをも的確に判断し実行した。ドイツ統合から25年、さまざまな困難を乗り越え、EUの中核として不動の地位となったことに、ドイツ国民全体の意志と忍耐と努力を感じずにはいられない。